

Free Paper Oral 16 (I-OR16)

Chair: Akio Ikai (The Cardiovascular Center, Mt. Fuji Shizuoka Children's Hospital)

Fri. Jul 7, 2017 1:05 PM - 1:55 PM ROOM 6 (Exhibition and Event Hall Room 6)

1:05 PM - 1:55 PM

[I-OR16-01] ファロー四徴症心内修復術における Skeletonization法を用いた肺動脈弁輪温存術式の術後成績

○佐々木 大輔¹, 阿部 二郎¹, 佐々木 理¹, 泉 岳¹, 山澤 弘州¹, 武田 充人¹, 加藤 伸康², 橘 剛² (1.北海道大学 医学部 小児科, 2.北海道大学 医学部 循環器外科)

Keywords: Skeletonization, ファロー四徴症, 肺動脈弁輪温存

【背景】ファロー四徴症の心内修復術にあたって弁輪温存の可否は重要である。我々は2013年から Skeletonization法(以下 S法)による弁輪温存症例の拡大を図ってきたので効果について検討した。【方法】2013年以降に S法を施行した TOF, または TOF type DORVの24例 (S群) と2009年から2013年までに通常の弁輪温存術式で右室流出路再建を施行した TOF 8例 (N群) を比較検討した。検討項目は、術前後の肺動脈弁輪径 (pre PV, post PV) (Z-value)、術後肺動脈流速 (post PS vel)、術後推定右室圧 (post RVp) および肺動脈弁逆流の程度 (PR post: none=0, trivial=1, mild=2, moderate=3, severe=4) を検討した。(対応のある t検定、および対応のない t検定)。【結論】両群間において、手術時年齢、体重、術前肺動脈弁輪径に有意差は認められなかった。pre PVで Z-1.5以下の症例は S群で8/24例(33%)、N群で0/8例(0%)であった。pre PVと post PVの比較では S群 (pre PV -0.91 vs. post PV -0.63 ;p=0.012)、N群 (pre PV -0.64 vs. post PV -0.44 ;N.S.) と S群において有意差を認めた。post PS (S群 2.9m/s vs. N群 3.1m/s ;P=0.16)、post RVp (S群 46mmHg vs. N群 56mmHg ;P=0.17)、PR post (S群 1.8 vs. N群 1.4 ;P=0.07) であった。S群で pre PV Z -1.5以下の8例(z=-1.8)は、post PV Z= -1.3, post PS 2.6m/sであった。術後半年以降に評価しえた両群間 (S群 8例、N群 8例)比較では、post PS (S群 2.1m/s vs. N群 3.4m/s ;P<0.05)、post RVp (S群34mmHg vs. N群59mmHg ;P<0.05)、PR post (S群 2.2 vs. N群2.2 ;P=1.0) であった。S群で再介入が必要となったのは3例(手術2例、PTA1例)、N群で2例(手術1例、PTA1例)であった。【考察】S法による弁輪温存術式により有効に狭窄解除が可能であり、Z-1.5以下の症例において狭窄解除は可能であった。【結語】prePVが z-1.5以下の症例においても S法による弁輪温存手術が有効であった。